

101. 無用の用

2025 年のノーベル賞は、生理学・医学賞に阪大の坂口志文特任教授が、化学賞に京大の北川進特別教授が選ばれた。万歳だ。坂口教授は「免疫をコントロールする制御性T細胞を発見し、性質を明らかにした」こと、北川教授は「多孔性材料の金属有機構造体(MOF)を開発し、応用に道を開いた」ことが評価されたことによるという。二人とも 1951 年生まれの 74 歳。

坂口教授は、座右の銘はとの質問に「そんな四字熟語のような信念はなくて、自分に言い聞かせるとするなら、本当に『一つ一つ』ということになる。研究の実験もそうだし、論文も書かなきゃいけないが、一つ一つ仕上げてという意味」と答えている。いい感じだ。

一方、北川教授には若い頃から大切にしてきた言葉があり、それは中国の思想家・荘子の「無用の用」という言葉だという。「その時代にみんなが求めているものばかり見ず、少し視点を変えたと、違うものがよくなって見えるという教え。これはサイエンスには重要な考え方」と強調している。ここでは、この「無用の用」について少し述べることにしたい。

簡単にいえば「無用の用」は、“一見役立たないように見えるものが役にたつ”といった意味合いだろうが、手持ちの本で「無用の用」を調べると、『莊子』の人間世篇に「人皆知有用之用、而莫知無用之用也（人みな有用の用を知りて、無用の用を知るなきなり）」とあるのを知った。同時に『莊子』には「無用の用」に関する話が幾つかあるのも知った。

北川教授については、「学生のときに湯川秀樹博士の著書『天才の世界』に出合い、その中で荘子の思想を知り、その説得力に大きな影響を受けた」という記事もあった。そうになると、具体的にどのような内容に影響されたのかが気になり、その『天才の世界』を読みたいと思った。幸い地元の図書館にその本があったので借りてみた。『天才の世界』は正・続・続々の3冊があり、続々に「莊子」の章があり、「無用の用－莊子の創造論」と題する一節があった。「莊子」の逍遙遊篇にある話だが、漢文の読み下しは省略し、湯川秀樹の分かりやすい文を要約して示したい。

湯川は「これはどういう話か」というと、要するに無用の用ということですね」と述べた後、訳文が続く。「恵子^{けいし}という人が莊子に言うには、幹が節くれだった大きな木があり、枝も曲がりくねっている。こんなものは切ってまっすぐの材木にすることもできず、道端に立っているが、いつまでも材木にしようという大工はない、君（莊子）は何か言うと、大きいことを言うが役に立たないではないか、だから誰でもそんなものは振り向きません、と恵子はいうた」、「そこで莊子がいう、君はイタチを見たことがあるか、体をかがめて隠れたり、何かをつけ狙ったり、あっちこっち飛んだり跳ねたり、所かまわずあっちこっちしている。しかし、ついにワナにかかって殺される。ところが、この大きな木は、何の役にも立たないというので、いつまでも大工に目をつけられず、切られることもない、だから何の役にも立たないというのがまたいいのだ」。

これについての見解を湯川秀樹は要約次のように言っている。「こういう話は『莊子』全体にあっちこちに出てきますが、これは一種の創造性の理論とか天才論一般につながる話で、既成の枠の中へ収まるものとか、器用で何かできるというのとは非常に違うもので、普通のことに役に立たないが、莊子にとっては、そこに何事が起こっても自分の道を行くというか、とてつもない大きなことをするとか、それが人間の本当の値打ちであるということが含まれているというわけですね。しかも、私たちがいつも言っているリダンダンシー（筆者注：redundancy＝冗長性）みたいな、そういうものがなければ独創的なものは成長しないという意味も含まれている。まさに創造論、天才論でもあるわけですね」、「恵子の見方は常識的で、莊子はそれともう一つ違う、

ひっくり返した見方をする。そうすると、全く違ってくるじゃないかということを言っている。これはまさに創造論です」。

莊子の短い話から湯川秀樹は奥深い洞察を行い、味わい深い文章となっている。恐らく、北川教授は湯川のこの文章を学生の時読んで感銘し、研究を続けたのではないかと思った。間違っていたら失礼なことです。

余談になるが、「無用の用」という言葉を江戸時代に使用した例がある。

天明元年(1781)、武蔵国男^{おぶすま}衾郡本田村（埼玉県深谷市本田）出身の著名な和算家・藤田貞資は『精要算法』を著した。その本の凡例の冒頭に「今の算数に用の用あり、無用の用あり、無用の無用あり」とある。そのあと詳しい説明が続くが、それぞれ、実用的で有益なもの、実用的でないが有益なもの、何の益にもならないものを言っている。いたずらに奇をてらうだけで、やたら複雑な問題を「無用の無用」として排除し、良問のみを集めたこの本が刊行されるや良質な教科書として和算家（算術家）の間で一世を風靡した。莊子の「無用の用」からもってきたといわれる。

(2025 年 10 月 13 日)